弁証法における具体と否定
―ヘーゲルとジェンティーレの比較研究

吉田真哉

はじめに

ジョヴァンニ・ジェンティーレ（一八七五―一九四四）は『ヘーゲル弁証法の改革』のなかでゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（一七七〇―一八三一）の論理学を批判した。この問題をめぐりヘルベルト・マルクーゼは興味深い見解を示している。彼はヘーゲルとジェンティーレの関係について「ジェンティーレの哲学はヘーゲルの哲学と何の関わりも持たない」(1)と指摘した。これは極めて否定的な評価を意味する。この指摘が興味深い理由は、ジェンティーレが多大な影響を受けたベルトランド・スパヴェンタに対して、マルクーゼがヘーゲル解釈史への重要な寄与をなした人物であると肯定的に評価している点にある。これは奇妙である。スパヴェンタとジェンティーレの立場はかなり近く、考え方や前提の多くを共有しているからである。ジェンティーレがヘーゲルを批判する際、彼はこれと同時にスパヴェンタ哲学の意義を強調した。それにもかかわらずマルクーゼは、両者を対極的に配置した理由について説明していない。ひょっとするとこの評価にはジェンティーレの歴史的な立ち位置が大きな影響を及ぼしているのかもしれない。

ジェンティーレはベニート・ムッソリーニの側近として「ファシストの哲学者」と評される活動に従事した哲学者でもあった。こうした活動を支えたのがヘーゲルの誤読に由来しているとマルクーゼは考えた。このためにスパヴェンタとジェンティーレは対極的に位置づけられたのかもしれない。

マルクーゼによれば、ヘーゲルの国家哲学が合理的な基準および個人の自由によるものであるのに対して、ジェンティーレはこの基準や自由を誤解しており、内容的にかけ離れた「ヘーゲル哲学の戯画」(2)を描写しているとされる。ここで問題視されているのはジェンティーレ独自の立場であり、この立場に関係する政治的な実践である。ジェンティーレ独自の立場は「行為的観念論」

である。これは思考する行為を実在と重ねる立場である。これをマルクーゼは思考の神格化と捉え、さらに「所与」(3)の束縛から思考を解放することを妨げていると見なした。したがってジェンティーレの立場は所与の事実を肯定したうえで成立し、ヘーゲルの精神から遠ざかっているとされる(4)。ヘーゲルの精神は所与のものから自由や解放を目指したのに対して、ジェンティーレの観念論は所与のものに拘泥してしまっているためである。この相違について鮮明にするために、マルクーゼはあえてヘーゲルとジェンティーレは何の関わりも持たないと強く表現したのかもしれない。

しかしながら本当にヘーゲルとジェンティーレは何の関わりを持たないのか。このマルクーゼのジェンティーレ解釈こそむしろ、ファシズム支持という所与の事実の肯定に立脚した解釈なのではなかろうか。もしそうであるとしたら、これは不幸な事態である。ジェンティーレの哲学とファシズムの関わり(5)において、彼の思考と実践のあいだに何らかの因果関係あるとしたら、この関係の明確化は重要だからである。この点をめぐるマルクーゼの姿勢は、その明確化のための用意や準備に手を抜いているように感じられる。

以下では、ジェンティーレをめぐる理論と実践の問題を念頭に置いて彼のヘーゲル批判について取り上げる。弁証法の功罪を視野に入れながら、ある思想家の理論と実践の問題を捉え直したいと思うからである。このことから先ず、ジェンティーレによるヘーゲル批判について明らかにしたい。次いでこの批判に該当するヘーゲルの論理学について見ておきたい。そして具体性への両者の視点を比較し、それぞれの長所と短所を示唆する。これによって弁証法の功罪について考察したい。

一　ジェンティーレのヘーゲル批判

『ヘーゲル弁証法の改革』のなかでジェンティーレはヘーゲルを批判しながら自身の哲学の特徴を明らかにした。この著書は彼独自の哲学史的観点の説明から始まっている。それは「思考された弁証法」と「思考する弁証法」の区別である。この区別は哲学史上における実在の問題に対する彼の捉え方に立脚したものである。ジェンティーレにとって実在を解明するために必要な方法は弁証法であった。そしてこの弁証法には段階が設けられており、この段階は哲学史への想定によって明らかにされる。

思考された弁証法についてジェンティーレが想定しているのは、プラトンの対話術である。ジェンティーレによればプラトンにとって真理や真なる実在は、認識する主観から独立しており、この認識に先立ってすでに定められたものである。すでに定められた真なる実在へ接近するプラトンの方法は対話術である。認識する主観と認識される客観の区別をこの対話術は前提しており、

そして客観の側に真理を配置する。したがって概念というものも客観に対応する場合は真であり、対応しない場合は偽ということになる。こうした真理をめぐる主観と客観の関係をジェンティーレは諸概念の固定的な関係と見なし、古代の哲学における「真理の絶対的客観性」(6)を指摘した。

これに対してヘーゲルは、認識する側の認識する行為（思考）を重視した哲学者と見なされた。ヘーゲルの弁証法を用意したのは、ジェンティーレによればイマヌエル・カントであった。「弁証法を関係の学と見なすならば、プラトンのような古代の弁証法は思考された弁証法である。そしてカントのカテゴリー論に不可欠の新しい弁証法が思考する弁証法であると述べることができる」(7)。カントのカテゴリー論が思考する弁証法とされるのはなぜか。ここでは「弁証法」というジェンティーレの用語の意味から確認しておきたい。

ジェンティーレの弁証法には独自の形而上学的な想定が反映されている。「弁証法の概念は、それがどんなかたちであろうとも、実在についての基本的な論理と法則による魂である」(8)。弁証法という概念・方法に対して肯定的であろうとも否定的であろうとも、実在を探求しようとする学的実践には魂が宿る。そしてこの学的成果にその実践の魂が残される。こうした魂をめぐる学の実践が弁証法である。したがってプラトンやカント、そしてヘーゲルの学的実践も、その魂が認められるかぎり弁証法的であることになる。

ジェンティーレはカントの弁証法の特徴を、認識する主観と認識される客観の関係の逆転に見出した。これによって問題は真理の客観的性質ではなく、真理を意識する主観の行為となる。ここにジェンティーレは思考する弁証法の特徴を見通す。思考された弁証法が思考に先立つ客観に永遠的な真理を見出すのに対して、思考する弁証法はむしろ逆に、こうした客観を創造する主観の思考の力 virtù を重視し、この力の意義を重視する(9)。ここでの思考の力は、実践に宿る魂にかなり近い意味合いを持つ。そしてこの思考の力にジェンティーレは学的価値を認めた。「思考された弁証法は死の弁証法であると言うことができる。思考する弁証法は生の弁証法である。前者の基本的前提は実の所、すべてが永遠的に規定された実在や真理である、ということにある。ここでは実在の行為的な決定といった新しい決定を考え出すことはできない」(10)。死の弁証法で想定されているのは、プラトンの弁証法である。ジェンティーレにとって弁証法の生死は、主観的な働きかけに依存している。彼によればプラトンの弁証法は主観的な働きかけの余地がおおく残されていないために、学の活力を失ったものとされる(11)。これに対して生の弁証法は思考という行為と実在を同一化する。こうした行為と実在の同一化が彼の観念論の特徴である。

認識する主観から独立した客観的真理を求める弁証法はプラ

トンによる弁証法であり、思考された弁証法である。思考された弁証法は、主観の思考する働きに先立って、すでに与えられた真理の発見や再接近を目指す。これに対してカントのカテゴリー論は、認識主観固有の思考のはたらきを重視する立場である。こちらは思考する弁証法とされる。「諸概念がカテゴリーの生み出すものであるということをカントによって納得するのであれば、概念それ自体として考察される根源性（客観性）といったものはすべて捨てられ、真の概念（concetto）は受胎する（concepire）行為そのものからなる」(12)。ジェンティーレによればカントのこの立場を継承し発展させたのがヘーゲルである。これは客観よりむしろ主観に、真理の比重を大きくさせることを意味する。しかしながらヘーゲルについて彼は、カントの継承・発展という点では高く評価しながらも、これと同時に改革の必要があるとも捉えた。以下ではこの改革について論及するために、ジェンティーレ独自の考え方についてもう少し言及しておきたい。

実在は思考という行為に等しいとジェンティーレは考えた。これについて彼は『純粋行為としての思考行為』において詳しく論じている。実在と思考を同定する彼の意図は、「具体的思考」(13)の意義の強調にある。この具体的思考は彼独自の意味が込められた概念である。

日本語の「具体的な」という語においては、「日常的に経験可能な」や「感覚的に把握可能な」といったことがおもに連想されよう。これに対してジェンティーレが用いている「具体」は、「共に成長する（con-crescere）」という意味合いを強く持つ。ジェンティーレは具体について、凝固された確実さといったものとは真逆の、成長や発展といった運動的な過程を想定していた。そしてこの具体的思考に実在は連関する。実在と連関するということは、先の思考された弁証法と思考する弁証法の区別もこれに関わるということを含意する。思考された弁証法と思考する弁証法は、具体をめぐる発展的過程において捉え直すことができる。これについての私のイメージを示すために、ここである物語を引き合いに出しておきたい。

あるところに真面目な仕立屋がいた。この仕立屋は仕事を認められ、王室に招かれることになった。そこで仕立屋は特別な素材を用いた衣装をつくろうと考えた。これは愚者には見えない素材であった。残念なことにその王国の王様と大臣たちは愚者であった。愚者であったので、愚者であることを隠そうと取り繕った。したがって服が見える振りをした。王様はその服をまとって城下町をパレードすることにした。しかしながらさらに残念なことに、その王国の国民も愚者であった。国民も王様や大臣たちと同様に、自身の愚かさの隠蔽が最優先の関心であった。そこに愚かであったが正直な子供がいた。愚かなために子供には服が見えなかった。しかし正直であったので、王様が裸であることについて疑問を投げかけてしまった。この疑問は国民にとって福音であった。認知

的不協和を解消してくれる視点を提供してくれたからである。このために善良な仕立屋は嘘つきと仕立てられた。彼らはやはり愚者であった。一連のこの流れで登場した者たちは、仕立屋が本当に嘘つきであったのかという視点から問いを持とうとせず、流されるままであったからである。不協和という不快さに耐え、慎重な態度を保とうする者は、そこには誰もいなかった。

さてこの物語において、これを解釈する主観的な働きかけが生じなければ、これは具体的には無意味であるというのが、ジェンティーレの主張である。この物語は、この物語を記した著者の思考に依存している。これは同時に、この物語に接する読者にとっては、その著者によってすでに思考されたものであるということを意味する。この物語を読解する読者の主観的解釈がほとんど生じないために主観的な意味がほぼ生じないとしても、主観から独立した客観的な意味も同様にないということが、ここで主張されるわけではない。重要なことは、意味を求める行為そのものが主観的な意味を含まざるを得ないということ、そしてこの主観的な意味（思考する行為・読者の思考）は客観的な意味（かつて思考された行為・著者の思考）に連動しており、意味という地平においてその客観は主観化されないかぎり無意味である、ということである。そしてまた現在的な思考を停止し、客観的に定まった解答として固定化させることは、ジェンティーレにとって死の弁証法に堕してしまうことに等しい。先の物語を引合いに出すのであれば、思考し続けるためには、仕立屋はやはり嘘つきだったのではないかという問いの余地をつねに確保しなけなければならない。問いの余地が確保されなければ結論は固定化され、思考は完了してしまうからである。

客観的な意味は主観的な意味づけに全面的に依存している。この意味づけの行為は歴史的である。かつて意味づけられた客観は、現在においては思考されたものとしての客観である。したがって自分自身による思考であっても、これが過去に思考されたものであるならば、それを現在において再び思考する行為を試みない限り、その弁証法は活力を補填する機会を失うとジェンティーレは考えた。

物語を執筆した者による、この執筆を支えた思考もまた、この物語に接する者にとってはすでに思考された思考である。換言すれば過去の思考である。そしてこの過去の思考を、現在の行為によって捉え直す行為が思考する弁証法である。この弁証法の特徴は、この物語に接して「大衆批判」や「批判的思考」といった視点へ近づく行為を、すでに定められた解答への対応ではなく、行為する者の思考として捉えることにある。この点に主観の思考の力を創造として見出すことができる。これを創造と捉え直すことができる理由は、思考する者自身による新しい決定に、この行為の特性を見出すことができることにある。すでに定められた解答があったとしても、これはそれを思考する者自身の思考に依存し

ており、この解答を測定するための基準点は最後まで主観的であらざるをえないとジェンティーレは考えた。

こうした主観的な思考による行為によってはじめて、具体的な行為は実現する。そしてジェンティーレは具体的な行為の特徴として創造性を、それも現在的主体と過去的客体の共同的、あるいは現在的主体同士の共同的行為を思い描いた。いずれにせよ強調点は現在的な主体の行為に置かれている。さてジェンティーレはこのように考えながら、これと同時にヘーゲルの論理学を批判的に捉えた。以下ではこの批判について見ていきたい。

ジェンティーレがヘーゲルに批判的であるのは、生成概念に対してである。ヘーゲルの生成は存在と無の統一を意味する。ジェンティーレはこの統一を具体的に捉えなければならないと考えた、言い換えれば弁証法的に思考しなければならないと考えた。これに対してヘーゲルは、この統一を抽象的かつ非弁証法的に把握した。「ヘーゲルは生成の概念を実現することに代わって分析してしまっているので、この概念を持つことがなかった」(14)。ここでの実現が具体的な思考の行為であるのに対して、分析は抽象的な行為を示している。概念を持つことがなかったというのは、抽象へ陥ったということに等しい。ジェンティーレのイメージに近づけるならば、受胎していないために出産できていない、ということになる。

ジェンティーレにとって統一は、現在に行為する生成の論理的過程でなければならない。しかしながらヘーゲルはこの過程から逸脱してしまったために、抽象的な外的反省に頼らざるを得なくなってしまった(15)。これが批判の第一の理由である。さらにこの統一は現在的な行為ではないため、「すでに止揚されたもの」(16)を分析しているにすぎないというのが第二の理由である。以下では、なぜジェンティーレがこのように批判したのかについて確認するために、ヘーゲルの生成について見ておきたい。

二　ヘーゲルの論理学

ジェンティーレが批判したのはヘーゲルの『論理学体系』（通称『大論理学』）の生成概念である。ヘーゲルの『論理学』は真理へとたどり着くための方法について取り扱いながらも、いわゆる論理学に限定されない形而上学や学問論を取り込んだ著書である。ジェンティーレが問題にしている箇所は、この著書の最初の学の出発点の箇所であり、ここでは形而上学的な問題が議論されている。

真理の認識をめぐりヘーゲルが最初に着手したのは存在の問題であった。この出発での議論はヘーゲル研究史において大きな問題を孕むものであった。ここではそのヘーゲル研究史の議論には立ち入らず、ヘーゲル哲学固有の問題としてその存在の問題について論じたい。

ヘーゲルが論理学について思考した理由は論理学をめぐる彼の危機意識による。「論理学の亡骸を精神によって活性化し、これに実質を与える方法は、論理学を純粋な学にさせることのできるものでなければならない」(17)。ヘーゲルによれば当時の論理学は形骸化していた。形骸化に陥った原因は、論理学が実質や中身を考慮していない点に見いだされる。この実質や中身は「形而上学的な意味」(18)である。彼にとっての問題は、形骸化された論理学を再び活性化させる方法であり、このために論理学を形而上学化しなければならないのであった。ここでの形而上学と純粋な学はほとんどおなじ意味である。

こうした展開にはヘーゲル独自の考え方が前置きされている。それは否定の積極的な容認であり、そして弁証法である。ヘーゲルにとって否定性は拒絶の対象ではない。彼は否定を、反動の契機や運動の開始を可能にさせる要素としてむしろ肯定的に捉えた。この否定は先の引用文の「亡骸」も含んでいる。すなわち死んでしまった学という事態は、全面的に拒絶されているわけではない。問題はこの死んでしまった学を蘇生させる方法である。蘇生という方法を彼は肯定的に捉えた。否定されるべき存在や対象（ここでは死んだ論理学）であろうとも、蘇生を可能にさせる否定的媒介としての肯定のための契機という要素がこれには含まれているために、彼は否定されるべき存在も肯定的に捉えた。この蘇生させる方法が弁証法である。

否定は全面的に拒絶されない。否定は否定されることで肯定に、それも前進や進歩と捉え直すことのできる肯定に変転する。これをヘーゲルは「理性の真の概念への偉大な否定の歩み」(19)と述べた。論理学を形骸化させた原因は抽象化であり、この抽象化による固定化である。これに対して否定による具体化が、論理学を蘇生させる。「論理的な諸形式が固定的な諸規定として分裂し、有機的な統一に統合されていないために、これらは死んだ形式であり、ここに生きた具体的統一である精神は宿らないのである」(20)。ここでの生きた具体的統一である精神は、思弁とも表現される理性の真の概念に等しい。

ここでジェンティーレとの関係について言及しておきたい。具体性を積極的なものとして高く評価し、さらにこれについて統一への発展を念頭に置いている点で両者は共通している。具体性という語について両者が用いるニュアンスもかなり共通している。しかしながらこの具体性における否定の位置づけをめぐり、両者は大きくかけ離れる。以下ではヘーゲルの否定について見ておきたい。

ヘーゲルが否定を重視した理由は弁証法という彼独自の方法に由来する。そしてこの方法をめぐる想定に基づいて、彼は論理学の始元について考察した。この論理学の始元は存在論的であり、これは最も抽象的である純粋な存在の論述から始まる。具体的な思考に積極性を見出すヘーゲルが否定を重視した理由は、この始

元に見出すことができる。始元としての最も抽象的な存在は純粋であり無規定的な存在である。「存在、純粋存在は――それ以上の規定をまったく持たない」(21)。規定をまったく持たないこの存在に規定を持たせることは、その純粋性の否定を意味する。

ここでは否定がどこから与えられるのかということが、大きな問題となる。この問題についてヘーゲルは対立する見方を提示した。否定は一方、抽象・客観の側にすでに含まれており、純粋な存在そのものの内部から導き出すことができる。ヘーゲルはこれを直接性と述べた。しかしながらこれと同時に否定は、具体・主観の側から、つまりこの純粋な存在の外側から生じることがある。こちらは媒介と述べられる。この問題をめぐるヘーゲルの論述は両義的である。この両義性が維持される理由は彼の学問論に基づいている。ヘーゲルは学について次のように考えた。「学にとって本質的なことは、純粋である直接的なものが始元ではなく、学の全体がそれ自体循環であって、ここでは最初のものが最後のものとなり、最後のものが最初のものとなる」(22)。始元は即自の直接性だけで完結できない。最初のものが最後のものであるということは、これを同時的に捉えれば矛盾であり、拒絶されなければならない。しかしながらこれを運動として捉えるならば、変化と捉え直すことができる。言い換えれば変化という運動が前提されなければ、直接と媒介の両立は成立できない。ここでの重要な論点は、この運動が循環とされることである。

学の始元としての純粋な存在は、無規定で最も抽象的なものである。しかしながらこれはかつて媒介されたものの最終的な結果であり、時間的経緯への視点にまで視野を広げると即自の直接性であることができなくなる。この最終的な結果は、歴史を介した絶対精神だからである。このことから学を進める否定は、すでに学そのものに含まれていることになる。学の開始の直接性には、直接性の否定が契機として含まれているからである。そしてこれと同時に無規定な純粋の否定は外的な反省に依存している。規定を与えるのは、概念ではなく認識する者の存在だからである。

さてジェンティーレのヘーゲル批判の要点は、始元に直接性も含む循環という考え方にある。これはヘーゲルが出発点において直接性を確保し、これの重要性を媒介性の重要性と両立させようとすることへの批判を意味する。学の始元の純粋存在が、最初ものでありながらも最後のものであるならば、ヘーゲルのこの最初のものの否定によって始まる学の進展も、媒介的であると同時にこの直接性が捨て去られることがない、ということになる。このことがジェンティーレの眼には、創造的でありながらも導出的であるというように映った。そしてこれこそがヘーゲルへの批判をひき起こしているのである。ジェンティーレにとって論理学などの学を支える思考の行為は創造的なものでなければならなかった。そしてこの創造を徹底的に具体化させるためには直接性に依拠できないと彼は考えた。彼は否定の源泉を、主体的な創造によ

る出産のような行為として捉えた。ジェンティーレによれば、ヘーゲルが論理学を蘇生させるために生きた具体的統一をいかに重視していようとも、彼の具体性は不十分であった。それでは学を媒介へ集約させなかったヘーゲルの狙いは何であったのか。以下ではこの問題について見ておきたい。

論理学であろうともこれが学であるかぎり、ヘーゲルはその方法を弁証法として捉えた。弁証法は発展する現実を把握するための方法である。この学的把握が媒介を繰り返すことで、その学的価値が高まるとヘーゲルは考えた。先の物語について、ここでもう一度取り上げておきたい。あの物語から愚かさの否定としての素直さの意義（子供の役割）を読み取った者がいたとする。裸での行進という事態への素直な疑問の提示こそ、愚かな事態を打ち破るという解釈は一定の説得性を持つだろう。この解釈にさらなる説得性を持たせるのは、物語の文脈や他の場面との整合であったりするだろう。いずれにせよ主観的な独断だけでは、あの物語の意味を明瞭化させることができるとは言えない。あの物語をさらに鮮明にさせるのは、客観的な関係をへたうえでの主観的な媒介である。このような弁証法的な認識の深化において、ヘーゲルは客観性の意義を等閑視しなかった。これは文字通り最初から最後まで失われることがなかったのである。このためにむしろヘーゲルの視点から、ジェンティーレの観念論へ批判を投げかけることができるだろう。それはすなわち、ジェンティーレの観念論が独我論に陥ってしまっている、という批判である(23)。

三　弁証法の功罪

ジェンティーレと独我論の関係について、ジェンティーレが独我論を支持してないとジェームズ・A・グレゴールは論じている。「ジェンティーレにとって独我論は道徳的に擁護できない立場であった」(24)。ここでの道徳は抽象と対比され、具体にかなり近い意味合いを持つ。グレゴールによれば、ジェンティーレは一切を主観化するような行為に積極性を見出したわけではなかった。発展的主観の真なる客観は「伴侶」(25)である。ここでの真なる客観は、具体的な客観にほぼ等しい。言い換えれば伴侶が不在の独我論的な主観は、偽の主観であり、抽象的な主観なのである(26)。

ジェンティーレの弁証法は客観を拒絶しない。これと同時に彼は、抽象的な客観も全面的に否定しなかった。ある作品に込められたある著者の意図は、この著者に初めて出会った読者によって十分に汲み取られる機会はあまり生じない。しかしながら著者の信念や作風がほかの作品などから明らかになっていくにつれて、著者と読者のあいだには一定の関係が形成されるようになる。著者と読者の間に一定の関係が形成されていない段階では具体的な意味がほとんど生じていないにしても、抽象的な意味まで消えてしまうとジェンティーレは考えなかった。ある物語はその物語

を記した著者の思考が宿る(27)。この主観から独立している著者の思考も、具体的な思考を活動させるための要素である。著者の思考や理解は、読者の主観的な思い込みや独善的な断定だけで可能になると彼は考えたわけではなかった。

それではジェンティーレにとってヘーゲルの何が問題であったのか。ジェンティーレによればヘーゲルの始元は、プラトンのイデアのようにすでに定められたものに依存しており、プラトン的な弁証法へ逆戻りしてしまうものであった。ここでの問題は具体の重点と、これに応じた主観的な行為の比重である。具体の発動条件はジェンティーレにとって主観的な思考であった。客観的にすでに定められた物語であろうとも、思考する者がこれを思考しない限り、この物語が意味を持つことがほぼないというのが彼の主張である。この思考という行為は主観的な働きかけに大きく依存する。

物語を構成する諸々の言語は、それらのニュアンスを歴史的に大きく変化させる。物語の著者によって使用された過去の言語の意味は、読者の現在的な言語の使用による解釈を通され、その意味合いを変化させる。ジェンティーレによればこうした変化が起きる理由は、その都度の主観的な働きかけが決定的であるためである。この点でヘーゲルのように先に存在を決定させてしまうと、変化について説明しづらくなるというのが彼の批判の要諦である。

しかしながらこのジェンティーレの思考には弱点がある。これは修正の余地が狭くなりすぎている点に見いだせる。先の物語を誤って「特別な素材を用いた仕立屋の責任（奇抜なことを選択したための身から出た錆）」と解釈してしまった者がいたとしよう。この者を修正させる場合、ジェンティーレの考えではこの修正もまた、その者自身の気づきによるほかない(28)。他者からの指摘をジェンティーレは全く無意味と考えたわけではなかった。しかしながらそれでもやはり、他者からの指摘の有効性は相対的には重要度が低い。これはつまり、独我論をジェンティーレは擁護していないとしても、かなり近づいているということを意味する。特定の答えが客観的に定まっているとしても、これを主観的に理解しない限り意味は生じないとしてしまっているからである。

これに対してヘーゲルの始元論では、すでに定められた存在からの導出の余地が確保されているため、他者からの働きかけによる修正について説明しやすくなっていると言える。自己の思考の修正可能性の説明をめぐっては、ヘーゲルの方に分があるのかもしれない。ただしジェンティーレの立場を代弁すれば、自身の思考の修正を最終的に決定するのは他者の思考ではなく自己の思考であるのだから、決定的であるのはやはり自己の思考である。しかしそれでもこの修正の契機をめぐり、他者からの働きかけが無用の長物であるわけではない。

両者の重点は異なっている。しかしながら両者は、何が正解で

あるのか白黒をはっきりさせることの難しいグレーゾーンの問題をめぐり、弁証法に一定の意義があることを認める点で共通している。現実の問題をめぐり、白黒をきれいに切り分けることが困難な場合では、弁証法のように曖昧さの余地を残す方法の方が有利なことがある。言い換えれば歴史的発展を前提に可謬主義を採用して、自身の思考の修正を当然視する構えには相応の価値を認めることができる。両者はグレーゾーンの問題をめぐり、段階的に白くなったり黒くなったりする問題について考察していたといえよう。

ところで弁証法による曖昧さの利点とは何であろうか。先ず指摘したいことは、多様な発言の促進である。たとえば真の弁証法という概念をめぐり、何らかの問題が生じたとする。ある者にとって真の弁証法とはファシズムを理論的に支持するものである。また別の者によれば真の弁証法はファシズムとは無関係である。こうした対立に好ましさを感じる者はあまりいないだろう。しかしながら素朴な疑問や問題提起を排除しない事態には、評価されるべき価値がある。思いがけない問題提起を排除しないことで、優れた別の視点が開示されるかもしれないからである。

曖昧で白黒はっきりしない思考の是認は、寛容さを支持する。曖昧であるよりも明確である方が思考の価値が高いのは当然である。しかしながら曖昧な思考から明確な思考への精錬において、素材となる曖昧さを否定してしまっては精錬しようがなくなる。また曖昧さの否定の仕方によっては、否定するその考え方こそ曖昧であるために否定されるべきという水掛け論を許してしまいかねない。このため寛容さの肯定と、この寛容さからもたらされる慎重さの肯定には相応の価値が認められるべきである。そしてこの寛容さや慎重さをめぐり、弁証法は相性のいい手段を示していると思われる。

しかしながら曖昧さがそのまま肯定されてしまうのは、やはり問題的である。有害な発言を許してしまい、そうした発言への反省の機会さえ減らし、ひいては発言することの責任も消失させてしまいかねないからである。また慎重さの肯定であろうとも、これには結論の安易な先延ばしが含まれやすい。これはやはり、できる限り回避したい事態である。この点で弁証法の価値についての論究も、曖昧であるのかどうかに基準を求めるのではなく多元性や多様性に求められるべきという考えへと、さらに媒介を加えていく必要が生じている、ということになる。

おわりに

マルクーゼの指摘を再び取り上げたい。ジェンティーレの哲学が合理的な基準を見落としており、所与の束縛に拘泥するものであるとマルクーゼは捉えた。この二つの指摘は否定という媒介の意味を、それも他者から否定されることの意味をジェンティーレ

が低く見積もっていると読みかえることができる。この論点に、ジェンティーレとファシズムをつなぐ、あるいは両者をつなげやすくする筋道を見通すことができるかもしれない。これはまたマルクーゼの「一次元的人間」につながる問題でもある。

このマルクーゼのジェンティーレ批判は、翻ってジェンティーレがヘーゲルを批判した場合でも、おなじように展開されている。ジェンティーレにとって弁証法的な否定が成立するためには自分自身の思考が前提されていなければならない。この点でヘーゲルの弁証法は主体的行為が不徹底であると彼は考えた。ここでの主体は否定という独創という意味を強く持つ。こうした真の否定をめぐり錯綜した批判が展開されてしまうのは、弁証法の否定や具体が多義性を許す曖昧さを認めているからである。このためにこの問題に接する論者によって、正反対の解釈が成立できてしまう。しかしながら曖昧さは、全面的に否定されるべきではない。否定されるべきであるのは安易な独断や即断である。この点をめぐる弁証法の曖昧さは、多元性や多様性を許す余地を確保し、慎重な議論を可能とする。これはまた、もしマルクーゼのジェンティーレ批判は手抜きであると批判したいのであれば、彼の「一次元的人間」の議論を考慮して慎重に議論を展開すべきであるということを意味する。今後の課題としたい。

参考文献

Gentile, Giovanni (2003a) 'La riforma della dialettica hegeliana e B. Spaventa', *Opere Complete di Giovanni Gentile*, XXVII, Le Lettere, pp. 3-39.

Gentile, Giovanni (2003b) 'L'atto del pensare come atto puro', *Opere Complete di Giovanni Gentile*, XXVII, Le Lettere, pp. 183-95.

Gregor, A. James (2001) *Giovanni Gentile: Philosopher of Fascism*, Transaction Publishers.

Harris, H. S. (1966) *The Social Philosophy of Giovanni Gentile*, University of Illinois Press.

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich (2014) *Wissenschaft der Logik I*, Werk 5, Suhrkamp Verlag.

Marcuse, Herbert (1986) *Reason and Revolution: Hegel and the Rise of Social Theory*, 2nd edition with supplementary chapter, Routledge & Kegan Paul LTD.

中埜肇 (1979) 『ヘーゲル哲学の基本構造』、以文社。

Popper, Karl (2002) *Conjectures and Refutations*, Routledge & Kegan Paul Ltd.

Schattenfroh, Sebastian (1999) *Die Staatsphilosophie Giovanni Gentiles und die Versuche ihrer Verwirklichung im faschistischen Italien*, Peter Lang GmbH.

新明正道 (1977) 「ファッシズムの社会観」、『新明正道著作集　第7

巻』、誠信書房、三一―三七九頁。
Wakerfield, James (2015) *Giovanni Gentile and the State of Contemporary Constructivism: A Study of Actual Idealist Moral Theory*, Imprint Academic.

注

(1) Marcuse (2003) [403].

(2) Marcuse (2003) [391].

(3) Marcuse (2003) [405].

(4) ファシズムをめぐる理論と実践の問題についてヘーゲルとジェンティーレを一括して論じた研究者もいる。たとえば新明正道はファシズムの観念の形成に寄与したヘーゲルの感化について論及した（新明（1977）[62]）。ここで新明はさらに、スパヴェンタとジェンティーレを同列に扱っている。

(5) この関わりをめぐり、現実の行為と思想上の真偽あるいは優劣を重ね合わせてもいいのかという問題提起は重要である。この問いかけはファシズムへの賛同を中和化させる効果を持つからである。そしてこの問題提起はファシズムの支持を含まない。たとえファシズムが悪だとしても、偏見や常識などによってこれを悪と定める行為もまた有害的ある。こうした決めつけは、むしろその悪を再生産させているかもしれないと、少なくともその悪の再生産を回避できていないと考えられるためである。このために行為と思考の問題について、それぞれを切り分け中和化させた考察に価値を見出すことができる。しかしながらここではこれを指摘するにとどめておきたい。

(6) Gentile (2003a) [4].

(7) Gentile (2003a) [5].

(8) Gentile (2003a) [3].

(9) この「創造」という語には注意が必要である。ジェームズ・ウェイクフィールドはジェンティーレの創造がスパヴェンタの自己創造に由来していると指摘した（Wakefield (2015) [351]）。彼はさらに、この概念がデカルトの我思うによる正当化の議論やスピノザの自己原因などの哲学史的な奥行きを持ちながら、なおかつ現代的な構成主義の議論にまで関係していると論じている。

(10) Gentile (2003a) [5].

(11) ただしプラトンの学の実践は、それでもやはり弁証法である。したがってこの学の実践は完全に死んだ行為であると、ここで主張されているわけではない。その実践の魂は客観への再接近に見いだされる。再接近という行為への評価が低い理由は、すでに定められてしまった真理という設定にある。言い換えれば独創や創造の余地があまり残されていない点が問題視されているのである。

(12) Gentile (2003a) [5].

(13) Gentile (2003b) [183].

(14) Gentile (2003a) [22].

(15) ここでカール・ポパーとジェンティーレがヘーゲルの弁証法批判をめぐり似てくるのは興味深い。テーゼがアンチテーゼを生成するというヘーゲルに代表される弁証法論者たちの表現についてポパーは、これが「批判的な態度」によって生み出されるものであると批判した（Popper (2002) [423]）。ポパーのこの批判的な態度はジェンティーレの「思考」と似た論点を示している。両者は生成をめぐり否定の作用を重要視しているためである。両者はヘーゲルの生成を保存として捉え直し、これを批判する。ただしポパーはジェンティーレも開かれた社会の敵と評価する可能性が高く、またとりわけ思考と実在の一致という信念を厳しく批判し、否定されるべき矛盾と考えただろう。

(16) Gentile (2003a) [21].

(17) Hegel (2014) [48].

(18) Hegel (2014) [41].

(19) Hegel (2014) [39].

(20) Hegel (2014) [41].

(21) Hegel (2014) [82].

(22) Hegel (2014) [70].

(23) 直接性から媒介への移行をめぐりヘーゲルは、媒介する主観の創造的な否定の実践を考慮しながら、客観の側の自己他化という作用も重要視した。客観の側の重要さについてヘーゲルはジェンティーレよりもはるかに高く評価していたために、弁証法的な発展を主観と客観の運動を含む絶対者の自己運動というように考えた。このことについては中埜肇の指摘を参照されたい（中埜 (1979) [236]）。

(24) Gregor (2001) [23].

(25) Gregor (2001) [24].

(26) セバスティアン・シャッテンフローも同様に捉えた。「主観と客観は思考行為において一体化する」（Schattenfroh (1999) [52]）。これは時間的な過程が前提されている。この過程のあるところを切断すると、その切り口は自我の産物への還元という相貌を呈するかもしれない。しかしながらすべての切り口が自我の産物に還元されるわけではない。H・S・ハリスはここに、「あらゆる発展の根である自己否定という行為」(Harris (1966) [30]) を見出した。この発展や自己否定は倫理的である。これらは理念的な自我による統一の過程であり、非我や他者との関係の調停を目標としているからである。

(27) ある猿が極めて長い時間をかけてタイプライターを叩き続けた結果、ウィリアム・シェイクスピアの作品を打ち出したとしよう。この場合では客観の側に思考という意味を見出すこと（猿の思考による結果と解釈すること）が一般的には困難であるために、抽象の段階でも意味が含まれていないということが帰結するかもしれない。しかしながらこれを主張するためには、人間以外の生物や存在は思考しないという証拠が必要となる。ジェンティーレ

の視点から考察するならば、諸々の状況判断から総合して猿が思考したと結論づけて考える者にとっては、その作品は猿の思考による作品である。

(28)

仕立屋の責任と解釈する者にとっては、この解釈がもちろん正しい。その解釈を論駁するためには、抽象的・客観的な判断材料などからの、また他の文との整合性や同一著者の他作品との一貫性などの視点からの正当化を、本来であれば済ませておかなければならない。こうした作業を踏まえずにある解釈を一方的に偽とする決めつけは、水掛け論へ陥りやすくなってしまうだろう。

（よしだ・しんや　立正大学非常勤講師）